

## 綾瀬市立北の台中学校

研究テーマ「主体的・創造的に生きる生徒の育成」

～知的好奇心を育む協働学習を通して、学ぶ楽しさ・面白さを実感できる授業づくり～

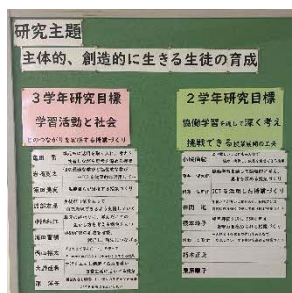
## 1 実践の目的

学習指導要領に明記された「主体的・対話的で深い学び」の実現をめざし、生徒が協働的に学ぶ体験を通して「学ぶことは面白い・楽しい」と実感できる授業を展開していくことが大切である。主体的に学ぶ姿勢を育むことが、生涯学び続けていくためには最も重要であり、そこで立ちはだかる様々な問題を解決するための方法を創造する力こそが、これからの未来を生きる子どもに求められている資質能力だと考え、研究主題を「主体的・創造的に生きる生徒の育成」とし、副題を「知的好奇心を育む協働学習を通して、学ぶ楽しさ・面白さを実感できる授業づくり」と設定した。

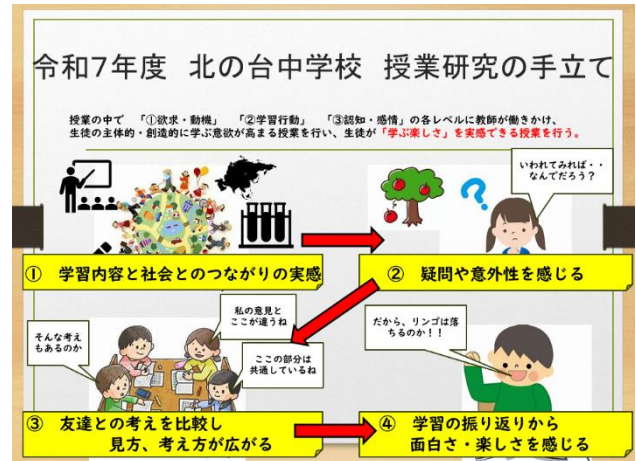
## 2 実践の内容

## (1) 校内研究の体制

各学年がチームとなって学年ごとに副題に沿った研究目標を設定し、個人目標を立てた。全職員の目標を校長室前の掲示板に掲示し、生徒、保護者に発信した。全職員が授業を公開し、互いの授業を参観し合った。また、公開授業の後には授業参観者全員でワールドカフェ方式による協議を行い、穏やかな雰囲気の中で授業について語り合う時間を設けている。



## (2) 研究の手立て



生徒が主体的・創造的に学びに取り組めるよう、4つの視点で授業改善を行った。

①学習した内容が社会でどのように生かされているかを意識させ、②単元の導入や毎時間の授業で生徒が疑問をもち、自分事として考えることができる問いを投げかけられるように授業を工夫した。③授業では生徒たちが協働的に学べるような探究活動を設定し、④授業の最後、単元の最後には個人で学習内容を振り返り、納得解を導き出す中で学ぶことに楽しさ・面白さを実感できる授業になるように授業研究を行った。

## (3) 授業スタイルの共通化(～振り返りを通して～)

綾瀬市型小中一貫教育推進事業の中で、授業の最初にめあてを提示し、学習者に授業の見通しをもたせ、授業の最後にめあてに沿った振り返りを行わせている。本校でも学習を振り返る活動を大切にしている。

## (4) 単元を意識した授業づくり

本校では公開授業を行う際に「単元計画」

を作成し、単元を通して身に付けさせたい力を明記し、単元を通して指導する視点を大切にしている。

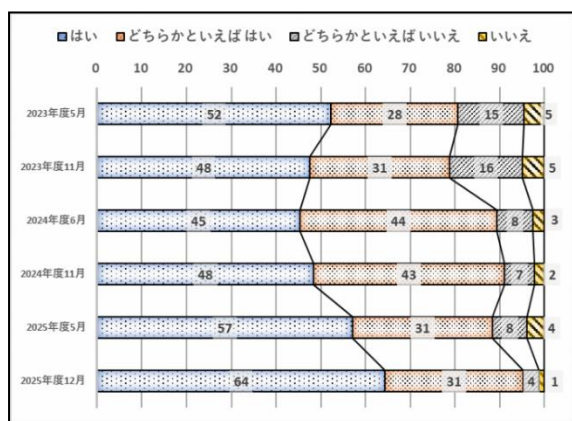
### (5) 生徒アンケートの実施

筑波大学教授、桜井茂男先生の「学習意欲」が育つプロセスモデルの考え方を元に、生徒アンケートを毎年2回、実施してきた。毎年同じアンケートを実施することで、年度内の変容や中学1年生から3年間の変容を見取るとを行っている。

## 3 実践の成果と課題

2(5)について、アンケートの回答には四件法(①はい②どちらかといえばはい③どちらかといえばいいえ④いいえ)を用いた。アンケートの回答率は各回85%程度の生徒が回答しており、長期欠席の生徒を除けば、学校全体の様子を読み取るためには十分な数の回答数があったと思われる。アンケート結果の考察とまとめは次のとおりである。

### (1) 学校では、落ち着いて学習している。



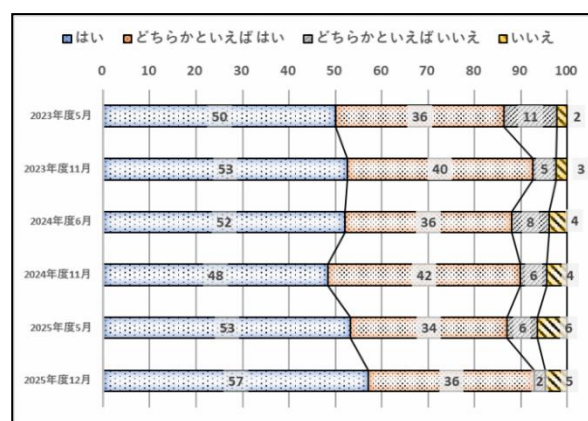
第3学年の1年時から3年間の変容

本質問においては、肯定的に回答する生徒の割合が入学当初から増加している。本校では、学習意欲の向上には「安心して学べる環境」の形成が不可欠であると捉えている。そのため、各教科をはじめ、総合的な学習の時間や特別活動において、学び合いや

協働的な学びの場を意図的に設定し、他者との関わりを通して学級への所属感を高めるとともに、課題や問いを共有しながら学習に取り組める環境づくりを進めてきた。

これらの取り組みが、生徒が落ち着いて学習に取り組んでいると認識する割合の増加につながっているものと考えられる。

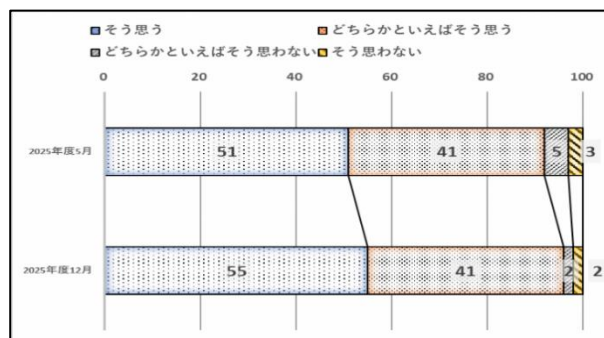
### (2) 授業では友達に教えたり、教わったりすることも多い。



第3学年の1年時から3年間の変容

本質問においては、肯定的に回答する生徒の割合が入学当初から増加している。北の台中学校では、周囲の仲間との共有体験を通して、互いを認め合いながら学ぶ活動を重視してきた。こうした取組を3年間継続する中で、協働的な学習による学びの深まりを実感する生徒が増加しているものと考えられる。

### (3) 先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思いますか。

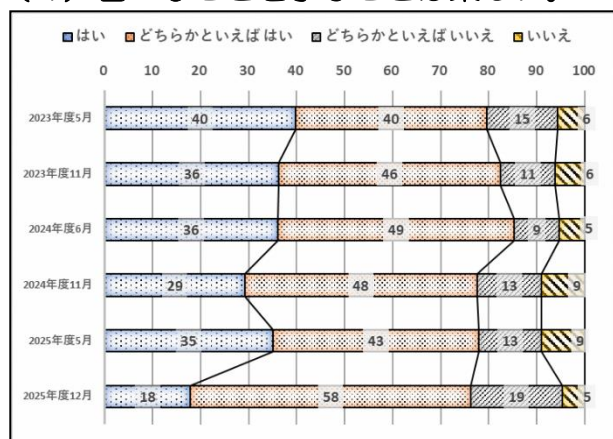


全校生徒の1回目と2回目の比較

本質問において90%以上の生徒が肯定

的に回答している。生徒の実情を考え、先生たちがチームになって授業研究を行った結果、先生と生徒が良好な関係を築けていると考えられる。

#### (4) 色々なことを学ぶことは楽しい。



第3学年の1年時から3年間の変容

本質問において、肯定的に回答している生徒の割合は全体として減少傾向にある。副題に掲げた「学ぶ楽しさ・面白さを実感できる授業」を目指した取組を進めてきたが、学年が上がるにつれて学習内容が高度化し、評価・評定への意識の高まりや進路に対する不安が増すことにより、学びを「楽しい」と捉える生徒が減少したものと考えられる。特に、進路選択を意識せざるを得ない時期においては、学びを楽しむ余裕をもてない生徒が増加する傾向が見られる。こうした状況を踏まえ、この時期においても学ぶことの楽しさを実感できる授業展開を工夫し、生徒が前向きに学びに向かえる授業づくりを進めていくことが、今後の課題である。

## 4 今後の展開

副題を「知的好奇心を育む協働学習を通して、学ぶ楽しさ・面白さを実感できる授業づくり」と設定し、2年間にわたって研究を進めてきた。その中で、生徒アンケートを継

続的に実施し、蓄積していくことにより、本研究の成果と課題が明らかになってきた。

成果として、協働学習を通して周囲の仲間と教え合ったり、互いの考えを深め合ったりする学習活動を重ねることで、安心して学べると感じる生徒が増加した点が挙げられる。また、協働的に課題に取り組むことにより、授業では友達に教えたり、教わったりすることも多いと回答する生徒が増加しており、協働学習が学びの質の向上に一定の効果をもたらしていることがうかがえる。

最後に、協働学習を主体的・対話的で深い学びへとつなげていくためには、授業の中で既習事項を活用し、学習内容が実社会と結び付いていることを生徒が実感できるような問いや課題を設定する工夫が求められる。今後は、単元を通して育成したい資質・能力を明確にした上で、学びの積み重ねを生徒自身が実感できる授業を展開し、獲得した知識を基に考え、議論する力を高める授業づくりについて、継続的な授業研究を行っていく必要があると考える。